

ヘルパー感謝祭(グループワーク記録)

A グループ

○事例発表を受けて

- ・言葉かけは難しいが、何気ない一言が大切だと感じた。
- ・当事者もヘルパーもお互いに相談する人が必要、その方が当事者もヘルパーも楽なのではないか。
- ・病気に着目するのではなく、その人との関係作りを大切にすることが重要だと思った。

○精神障害者への支援で感じていること

- ・何がきっかけで（どういった状況で）不安定になるか分からない。
- ・スポットで入るヘルパーにとっては、その時の精神状態（好不調）が判断しにくい。
- ・その時は何となくとも、後日苦情等を色々と言われることがある。
- ・相談員より「家族のことを話したらダメ、話しかけたらダメ、包丁は危ないから隠しておくように」等と事前説明を受けていたが、実際入ると意外と普通にコミュニケーションをとることができた（支援開始前に必要以上に構えてしまうことがあった）
- ・良かれと思って言った一言が逆効果となる。こだわりを尊重することが大切だと思った
- ・統合失調症の方について傾聴に徹することが大切ではないか
- ・自然に話しかけるように努めている
- ・状態急変時の対応に不安がある。
→緊急時の連絡体制を確認しておくことが重要。家族、相談員、病院CWに伝える。
- ・担当の保健師を知らないことがある、事前に伝えてもらっていない、連携していない。
- ・当事者の方は断りたくても断れないことがあるのではないか。
- ・ヘルパーの年齢について“若いヘルパーは気を遣うから嫌”“経験のあるヘルパーが安心”と言った声も聞く。
- ・独居の方が多い。
- ・“自分亡き後のことが心配…”といった声を聞くこともある。
- ・独居であっても在宅生活の継続を制度、社会が後押ししているが、家族や地域住民の思いはそうでないことがある、施設での生活が安心と…
- ・障害福祉は介護保険と違い、関係機関との連携が不十分、制度上の課題なのかスピード感と臨機応変さがないように感じる。
- ・身体介護の支援中、お風呂場で突然“死にたい”と言われることがある。
- ・官公庁が休みの土日祝、年末年始等に電話がかかってくることが多い
- ・最悪の場合の対応を契約時等事前に本人、家族、関係者間で確認した上で対応方法等を事業所内で周知している

ヘルパー感謝祭(グループワーク記録)

Bグループ

○事例発表を受けて

- ・『感謝している』という言葉を受けて嬉しかった。ヘルパーの一言がきっかけで元気になったのであれば嬉しい。
- ・今井さんの会話されるリズムがゆっくりで優しい。
- ・事例発表は聞いてとても良かった。何気ない言葉の大切さを感じた。
当事者からすると、ヘルパーは決してウエルカムではないのだと改めて感じた。
- ・事例発表のように、いろんな感情がありながらも、ヘルパーのことを思ってもらえる。
今まで、ヘルパー支援をあたりまえのように思われていた。
- ・目標に向かわれたことでヘルパー支援が終了した事例は嬉しい。

○（仕事を通して困ったこと）

- ・本人の気持ちを引き出しながら良い方向へもっていければいいと思うが、こだわりのどう対応したらいいのか。
- ・不調の原因が、身体変化の波なのか？精神的な波なのか？本人の言葉から掴み難い。
精神的に落ち込むこともある。
- ・ヘルパーが伝えようとする事が、当事者にうまく伝わらない。
- ・異性のヘルパーにボディータッチをされる。雰囲気を感じて上手にかわす必要がある。
- ・冬季など日中活動の減少も影響し、頻繁な電話の対応を実施。業務に支障が生じるが受け入れも必要。
- ・認知症の方、自宅内の本人の姿がなく大探しをした。

○（初回訪問で気をつけていること）

- ・いきなりの支援ではなく、本人の様子を聞き取る時間を持つ。
- ・本人もヘルパーに対して『どんな人だろう』と思っている。
『大丈夫だよ』という事をからだで表現し、気を遣わせないようにする。
- ・緊張しているヘルパーを見せないよう平常心で接する。
- ・あえて、住まれている地区の状況を知らないような対応をする。

○（質問）

- ・訪問中に『死にたい』『死んだらいいんだ』と言われる時の対応は？
どう返答したらいいのか？

（回答）

- ・死にたいという言葉が出る時は、少し元気になった時。ピンチはチャンス！
死にたいと言えるのでしんどさを聞いてもらったら良い。『死にたいぐらいしんどいのですね。何がそんなにしんどいのか？』と聞く。抱えない、連携は大事。
- ・統合失調症の方のことも知らなかった。いっぱい話を聞いて気づきがあった。
例えば、暴力。自分の価値観で暴力はいけないという目でみると健康な部分に目がいかない。自分の価値観を外す必要がある。外すと共感できる。

ヘルパー感謝祭(グループワーク記録)

Cグループ

○事例発表を受けて

- ・身近な人は頑張り屋さんであった。でも今思えば本人は辛かったのだろうと思う。
- ・本人への意欲が引き出せる言葉を上手く見つけられない。
- ・ヘルパーの重要性が身に染みた。
- ・統一した対応をするために、ヘルパー同士の情報共有が大切。
事業所によっては、上手く申し送りができていないことがある
- ・良かれと思ってかけた言葉は、本人に良くも悪くも影響する。
- ・本人のためにという思いで話をよく聞いていたら「〇〇さんじゃないと嫌」と依存的になられる方もいる。その線引きが難しい。
- ・本人が「しんどいわ」と話されたので、あえて声かけを控えたら、何も話さないヘルパーだと評価されたことがある
- ・支援後に「言いすぎた」「あれでよかったのか」と悩む。
- ・本人の状態、その時のタイミングで「やってみませんか」の声かけが大切。
時には、本人のための言葉がプレッシャーになる。
- ・本人と家族の気持ちに温度差があり、誰のための支援なのかと感じる。
また、映像を残して本人の状況を知ろうとする家族がいる。安全のためなのか、監視のためなのか、疑問を感じる。

○心温まるエピソード

- ・話せなくても、動けなくても、ヘルパーの声かけに表情で応えてくれる。
- ・笑顔で応じて下さったり、話をしてくださるのは嬉しい。
- ・限られた時間の中で関わりを何年も積み重ねていくことで、本人の状態の変化を見て感じられる喜び。元気になってもらえることが嬉しい。
- ・「あなたなしでは、ここまで頑張れなかった」と家族からの言葉
- ・スキンシップは、お互いの気持ちを温かくしてくれる。
- ・支援に入ることで逆に元気をもらえる。
- ・利用者から教わることもある。利用者は支援されるだけではない。